

シンフォギア Beyond
The Horizon

アーヴァレスト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自死を選んだ少女、移植によって生かされる
再び覚醒するその時、新たな運命が始まる

作注

初回アンケートの結果、MGS4とMGRの票が同率の為、両方の要素を取り入れる
方向性に決まりました

第二回アンケートの結果、主人公の装備する武装はツインバスターライフルとリフレクターインコムに決まりました

同率票でありましたので、サテライトキャノンとツインサテライトキャノン、リフレクターインコムはアミダクジで決定いたしました

目次

終わりと始まり

1

目指す場所

6

fortune

13

邂逅

18

For someone

23

暗躍する影

34

名付け

38

素養

43

ALICE

49

閑話休題

57

模擬戦

62

緊急出撃

71

友情と復讐

77

暗影

82

緊急事態

87

決戦開始

92

激闘の果て

97

終わりと始まり

「今日の任務も見事だった、君には興味のない事だろうが、本日の任務で君の組織に貢献した殺しの数は50だ」

「・・・」

都会のとある建物の屋上、底の端に立つ少女は電話の話を聞いてなかった

「自由・・・」

少女が求めていたのは、他からの束縛を受けず、自分の思うままにふるまえることだった

「これで、自由に・・・」

そして少女は飛び落ちる・・・死によって自由を得るために

＜それから12時間後＞

「なんだと!?!それは事実なのか!?!」

「ああ、事実だ、彼女の心臓が輸送中に盗まれた・・・何者かに」

「・・・」

「捜査はするが期待はするな、こういう関連は根が深く真相に辿り着きにくい」

「分かってる」

通話が終わり、その報告を聞いていた男は写真を見ながら呟いた

「了子君・・・」

そこに映る女性を見つめながら

<さらに半年後>

「移植された心臓は正常に機能、拒絶反応なし、各器官も正常・・・意識が戻らない以外は」

「それが問題なのだがね」

報告を受けていた人間はそう呟いてベッドに眠る少女を見る

半年前、自殺しようと飛び落ちた少女を

「意識が拒絶しているのか、再び目を覚ますことを」

「そうとしか言えません・・・」

「数週間前から不定期に起きている発作のほうは？」

「そちらも精神的なことだと思われます」

髪を撫でて、男は告げる

「1週間だ、それ以上は待てん」

「は、はい!!」

そう言って去っていった男は少しだけ寂しそうな顔をしていた

「……」

少女は夢を見ていた・・・その夢は、過去に自分が殺してきた人達、その場面だ

「やめて……」

しかし、止まらない、現実だというかのように続いていく

「もう、やめて!!」

もう、人に操られて誰かを殺したくない、だからこそ自殺を選んだのだ

「自分の心臓を貫いた!!ビルの下の鉄柵が心臓を破壊したの!!なのになぜ生きているの!!死なせてよお!!」

「死ぬな!!」

「また貴女なの?」

「生きて!!」

その声は強く、そして優しい

「いつも私の夢に出てくる貴女は誰!?ほっといてよ!!」

「私は誰でもない。君の中にいる・・・私は君だ」

「ふざけないで!!誰でもいいから私を殺して……」

そのとき、少女は気が付いた、胸の奥からあふれ出す熱を

「温かい……」

そして襲ってくる眠気、それに抵抗をせず受け入れた少女を優しく包み込むのは三人の少女らしき存在だった、少女にはなぜか彼女達といると安心できると思つてい

る
安心して眠れると、心の底から思うのだ

何故かは分からない、でも……

「ねえ先輩、ほんとに明日始末されるんですか？」

「ああ、本部の決定だ……」

その時、薄れていた意識に届く声が聞こえた

「これでいい……目を覚まして、まっっているのは……」

「駄目だ!!目を覚ませ!!生きるために戦え!!」

「もう……いいの」

「私は生きたい!!もう、死にたくないんだ!!」

次の瞬間、流れ込んでくるヴィジョンに少女は混乱した

自分とは違う意味で死んだ人がいること、そして生に貪欲である意味を知る

「……」

自分のように、死にたくても死ねない人間と……生きたくても生きられなかった人

間・・・その意見が一致する

「二人寂しく・・・死にたくない!!」

それは心の底からの叫びだった

「・・・!!」

だから少女は覚醒する、自由を勝ち取るための戦いをするために

目指す場所

「対象が・・・」

「消えた!? 内部からは開けられないはずだ!! 確認に行くぞ!!」

「り、了解!!」

そして部屋を開いた瞬間・・・

「がはッ!?!」

「な・・・」

上から降ってきた少女の攻撃で気絶した

そう、意識を取り戻した少女は体についていたセンサー類を全て剥がすと、カメラの死角となる入口上の僅かな隙間の部分へ上り、異変に気付いた人間が来るのを待っていたのだ

「・・・」

それから身ぐるみを剥いで着替える

といっても体格差があるので、長い袖を動きを阻害しない程度に切り落とし、余った袖をベルト代わりにして腰を縛る程度のものであるが

「うん、少しはマシかな」

それから向かったのは、先ほどの人間のいた監視室

そこにあるパソコンで調べ物をする

眠っている間何度も見たモノの正体に迫る何かがあると信じて・・・

「櫻井・・・了子」

そして見つけた、その正体を

「私の心臓・・・」

自殺しようとした少女に移植された心臓は・・・

「大事件の、主犯」

かつてない大事件を起こした人物の心臓だった

「でも・・・」

記憶を思い出しても、その時の記憶だけはない

むしろ、彼女の関わった三人の少女への心配と、三人と共にいる時の優しい時間しか

思い出せない

「何か、伝えたいことがあるの？」

質問したが、帰ってこない

「だんまり・・・」

その瞬間、少女の瞳に灯が灯った

「そうなんだ」

行く先は決まった、少女は胸に手を当てて告げる

「私は生きる、どんな手を使っても」

そこにかつての、死んだような眼をした少女はいない、そこにいたのは……生き生きとした目をした少女だった

「私は私だ、誰のものでもない、私には、私が命令する!!」

そう宣言して鏡を割る、そこに映る少女の片目が色を金へと変えた

「さあ、行こう」

行く先は、東京都のとある場所

そこに行けば、必ず会えると信じて

「付いたわね」

それから数時間後、現在地を確認していく先までの金銭を強奪、さらに近くの衣服店にて買い物と着替えを済ませて少女は目的地に向かい、到着した

「(ハハハ)……」

目の前に広がるのは港湾施設、さらに奥へ進むと巨大な潜水艦があった

そここそ、少女の目的地……旧・特異災害対策機動部2課……現・S・O・N・G.

の移動本部に他ならなかった

「あ……」

そして、見つけた……夢で見た三人の少女を

「つつ……!!」

そして、後ろから迫る存在に銃口を向ける

「危ないですね、それは」

「なっ!!」

確かに気配は後ろからした、反射的にそちらに向けたはずなのに……声はなぜか横から

「うっ!!」

「抵抗はしないでくださいね、あの子たちと同世代の子を傷つけるのは、少々気が引けますので」

「それは残念だ、抵抗させてもらおう」

その声は、拘束しようとした青年にとって久しぶりの声だった

「まさか……!!」

「そのまさかと言いたいが、イレギュラーなんだな」

その瞬間、空いた手で顔面を殴りつけ、緩んだ拘束を解いてバックステップで距離を

取った

「フイーネ・・・了子さん」

「今はそのどちらでもない」

「質問しても？」

「ああ、構わない」

戦闘状態を解き、青年は質問した

「貴女は、敵として戻ってきたのですか？」

「いいや、それは私の持ち主の決める事だ」

「・・・？」

「コレを見れば早いのではないのか？」

そう言つて、自分の服を縦に割く

そこには、胸の部分に縦に走る手術痕が

「心臓移植!!まさかその子の心臓が、貴女なのですか!？」

「そのまさかだ、私のイレギュラーな覚醒も、これが起因しているのだろう」

「・・・」

「そう睨むな、そしてそこにいるんだろう？風鳴弦十郎」

すると、すぐ近くの扉が開く

「いつからわかっていた？」

「割と最初からだ、おそらく、警戒行動で出た緒川の帰りが遅いので、怪しい物音のしたこちらへ来たのだろうか？」

「ああ、その通りだ」

その瞬間、少女がふらつく

「いかな、限界時間がもう来たのか」

「・・・」

「明日、○○○で待ち合わせだ、装者達とお前と緒川だけで来る事」

「分かった」

「そこで全てを話してくれるだろう、この子が」

そう言うと、愛おしそうに胸の傷を撫でる

「そのカツコのまま帰らせるわけにはいかな、着ていけ」

「感謝する・・・」

上着を着て、少女は告げた

「ありがとう、それじゃまた」

そして、夜の闇の中に消えていく

「さて、これからどう説明したもんかねえ」

「大変ですネ」

呆れながらも、明日に向けて、行動を開始した二人であった

fortune

「あれ……？」

次に私が目覚めた時、廃墟の中だった

「ここは……」

薄暗い部屋の中を、電源スイッチまで移動して点灯した

「電源は生きてる……って、実験室？」

「ああ、ここは私の実験室だ」

「フイーネ……でいいのよね？」

「ああ、そうだが？」

ガラスに映る自分とは違う顔に、私は質問して、即座に回答が得られた

「お前の精神状態が不安定になられても困るのでな、意識のない時に少しでも体を借りた」

「だからここに居るのね……って体を借りた？」

「ああ、そうだが？」

そういう彼女に少し引つ掛かりを感じて、私は告げる

「なにか隠してない？」

「これから話す、心して聞け」

「ええ、分かったわ」

そうして全てを聞き、私は思わず叫んだ

「あんた馬鹿あ!?!常識的に発信機あるに決まってるでしょ!?!」

「わ、私だってその位はわかる!!だが、あの時は」

「だいたい服切らなくても少し脱げばわかるでしょうが!!」

「そ、そう言われても、あの時はそこまで頭が回らなかったんだ!!」

はあ、と呆れながらも私は話す

「もういいわ、疲れた」

「済まない」

「ここに来たからには、理由があるんでしょう？」

「ああ、ここに私の開発した物が眠っている。それを取りに来た」

「なるほど、でそれはどこにあるの？」

長い、長い沈黙が始まる

「ねえ、まさか」

「わ、忘れてるわけ」

「忘れてるから沈黙したんでしようが」

「はい、置いた場所を忘れました」

はああああ、と今度はため息が長くなった

「コイツ使えねえ」

「それは酷くないか!？」

「事実でしょ、ポンコツ」

「・・・」

あ、拗ねたっぽい

「なにになに？拗ねたの？拗ねちゃった？」

「うるさい、少しは静かにできないのか？」

「やっぱり拗ねたんだ、可愛いなあ」

「うるさい」

拗ねたフィーネを身近に感じる、というか彼女は私の一部であり、私にもその感情があるということを示してくれてるのではないだろうか

「まあいいわ、今回だけ許してあげる。でも次からはせめて説明を先にして、私が困るか
ら」

「そうする」

うむ、反省してくれたようでは何より

「さて、探しますかね。目安とかない？ 臆気だけどここにしまったとかの」

「ああ、おそらくの位置は覚えていいるのだが」

案内された場所を探すが、無い

「ん」

そこをしばらく見ていると、変なことに気づいた

「フイ？！ネ、間違いなくここにあつたみたいよ」

「なに」

「誰かに持ち出されてるわね、少なくとも犯人は1人だというのは分かった」

「どういう意味だ？」

私は説明する、それは

「汚れ方よ、ここだけほかに比べて少ない。それはつまり、ここを誰かが片付けたという事、イコール？」

「明確な意図を持つて侵入した者がいるという事か!!」

「ええ、目的はここにあつたもの。聞いてなかったけどここに置いてたのってなに？」

「シンフォギア・0号機」

シンフォギア？何それ？

「ノイズに対抗するべく開発したものだ、その試作機がここにあったのだが、盗まれていたとはな」

「一応聞くけど、性能は？」

「システムとしての完成を目的としていたから、現行型に比べると未成熟な面がある。それでも基本機能は現行型と同程度だ」

「単に負荷が大きいだけという事かしら？」

「常人なら秒殺してしまう負荷だがな」

何それ怖い、と思いながら私は質問する

「それを私に使えと？」

「まさか、回収したかったただけだ。アレは私のモノだからな」

「ふーん？」

「信じてないな？」

「一応信じてあげる、それでこれからどうしようか？」

すると、フィルタは意外な事を告げた

「予定を変更してシンフォギア装者達と会おう」

「OK、そうしましょう」

さあ、楽しくなりそうだ

邂逅

「綺麗だろう？命の終わりは・・・切ないほどに。命は最後に残り香を放つ」

「了子さん・・・」

「私は既に死んだ身、その残滓だ」

私は胸の傷を撫で、そう告げる

「私の役割はほぼ終わりかけている・・・後は」

その瞬間、かけていた眼鏡を外し、私は告げる

「私怨を晴らすとしよう」

その瞬間、三人が歌う

これは予定調和だ、私が私を殺すための

「どうしてもですか!？」

「ああ、すでに私にはこれしか選択する気がない」

私は身構え、三人を見る

「さあ、行くぞ」

その瞬間、今揮えるフォニックゲインの全てで装いを整える

「シンフォギア!？」

「いいや、それですらない．．．ただの鎧だ」

一歩踏み出す、同時に立花響の懐に迫り、その腹部を強く殴る

「がはっ!？」

「うむ、この身体は凄いな．．．自分の思考より早く動くような感じだ」

「これでもくろえ!!」

「見えている」

攻撃予測ですら以前より優れている気がしている

それほどまでに身体能力が優れているのだろう

「はあっ!!」

「ふっ．．．!!」

横合いから迫る剣の切っ先を白刃取りさえ出来るほどに余裕がある

「なっ!？」

「驚くほどでもあるまい、私も君達と同じように進化したまでの事だ」

「んな事!!」

「ありえない? それこそあり得ないぞ? クリス」

優しくそう言い、私は再度構える

「すべてはもはや手遅れで、だからこそ延命手段はこれだけ。この絶望的な悪夢を越えた果てにこそ、この子はようやく明日の光へ踏み出せるのだ」

「どういう意味ですか!?!」

「私という自我のある限り、この子の魂が削れていく……それはかつて立花響を襲った出来事と似ている」

「つつ……!!」

命としての終わりの前に、人として終わってしまう……その直前でどうにか事態を回避できたが……今のフイーネはそれに近い

「滅び行くはずの魂を繋ぎとめることが出来る、これだけは紛れもない真実だ」

「まさか……」

そう、私は……

「殺してくれ、私を……それが私の願いだ」

「そんな事……出来ませんよ!!了子さんも一緒に生きれる道があるはずです!!」

「それこそ馬鹿を言え、恥知らずも甚だしいだろう。傲慢なのかもしれないが、私はこの子に生きてほしいと願っているのだ。そのためにはもう一度死ぬしかない」

そのためにここにいるのだと告げようとして……

「ふぎけるな」

私ではない声が響いた

「何を偉そうなことを言ってるのよ……内心ビビってるくせに!!」

「ぐっ……!!」

抑えようとするが、抑えられない

いや、これは……

「誰がそれを頼んだのよ!!言ってみろこのヘタレ!!」

「だれっ……が!!ヘタレだと?」

私はそう言ってるが動揺している、何せ言われたことは事実だから

「全部丸ごとぶちまけてしまえばいいじゃない!!本音は情けなくて矮小じゃないか!!大切な相手ほど見せたくないから、隠したがってつい誤魔化すようじゃヘタレと言われて当たり前でしょうが!!」

「やめろ……これ以上は!!」

「優しい嘘で誰か泣かせることだけは、たとえ貴女でも許さない!!本音でいけって言ってるでしょうが!!素直な気持ちを伝えればいいのかよ!!この期におよんで格好つけるな、野暮と分かれよこの大馬鹿があ!!」

そして……響達を見る

「この馬鹿をぶん殴って……言われただけじゃ理解できそうにないから!!」

「いいの？」

「ええ・・・思いつきりやってちょうだい!!」

「く、ああああ!!」

どうにかこうにか制御を取り戻す・・・そして

「しまっ!?!」

「はああああ!!」

「ぐああああ!!」

回避が間に合わず、一撃をもらう・・・と同時に

「うおおお!!」

「ああああ!!?」

奇跡が、起きた

For someone

「え．．．!?」

「嘘だろツ!」

私は作戦が成功した事に笑みを浮かべた

「上手くいったわね．．．」

後ろに倒れている少女．．．私から分離したフィーネを見る

「どうして．．．?」

「私のフォニックゲインと貴女達のモノを合わせたら、人一人は何とか出来るかなって思ったのよ．．．かなりの賭けだったけど」

その賭けに私は勝ったのだ、その代わり．．．

「私の中からフィーネが消えた代わりに、私の中にあつた彼女の記憶も大半が無くなつた．．．それでも大丈夫ね」

「いや、だからどうして分離できたんだよ!」

「簡単よ、分離する際にフォニックゲインそのものを人として形成、それに必要な情報は私自身を起点して構築したのだから．．．それが成功するかが賭けだったけどね」

必要だったのは人間一人分のフォニックゲインとDNA情報、そしてその中に入れる魂の三つと考えた

足りなかったのは人一人分のフォニックゲインのみであり、それを補う方法は大別して二種、シンフォギア装者との戦闘、あるいは彼女達のライブ時に生じる高レベルフォニックゲイン

そのうち困難なのがライブでの収集であり、簡単なのが戦闘であった

取捨選択の結果がとんでもないレベルの賭けであるのは仕方ないとしても・・・
「意外に痛かったなあ・・・」

お腹をさすって痛みを抑える、地味に痛かった

「で、そこにいる人はまだ出てこないのかな？」

「バレてたか・・・仕方ない」

陰から出てきたのは若い男の人だった、でも纏う空気というか何かが・・・

「貴方も相当、人を殺してますね」

「元殺し屋の君に言われるとはね」

「・・・」

私は押し黙る・・・彼は私の過去を知っている

「ねえ？サイレントガール？」

「つつ．．．!!」

やはり、私のコードネームを知っていた

「あなた、何者？」

「ヴェノムスネークといえは分かるかな？」

「なっ．．．!?!」

その名前は聞いた事のあるもの

それは．．．伝説の傭兵の名前だった

「伝説の傭兵．．．!!」

「おお．．．知ってたか」

笑う彼の表情はそこら辺にいる人と同じものだけど．．．

「ああ、それと君に渡すものがあるんだけど．．．その前に起きろ、フィーネ」

「ちっ．．．もう少しくらいバレないと思ってたのだが．．．」

そう言つて起きる彼女の胸は．．．私より大きそうだ

「怪しからん胸してんな．．．」

「誰か服をくれ!!変態がいる!!」

大いに正しい、目の前の男の人は変態だ!!

「酷くね?俺当たり前のこと言っただけだと思っただけど」

「目の前で普通そうに言われたら誰でもそういう反応すると思うのだが？」

「分かってて言ったんですけど、司令」

さて、フィーネも服着たし

「これを渡そうと思つてね、回収して改修した試作機だ⁰

「勝手に改造したのか？」

「初起動でいきなり適合者を殺すマシンなんて即改修に決まつてるだろ、馬鹿なのか？」

「・・・」

ぐうの音もでないとはこのこと、フィーネは押し黙つた

「まあ、システムとしては完成していたから改修作業は大変だったよ、リバースエンジニ

アリング出来てよかったけどね」

「私の作つた理論を理解したと？」

「無理、あんなん理解してるの君だけだろう？」

「その通りだ」

フィーネの理論は私も部分部分でしか分からない、というか

「というか絶対分からせる気無いだろアレ、資料としても杜撰すぎるファイリングだったぞ？あれでよく理論とかほざけるな」

「弦十郎君、あの人がいじめるの!!」

「そうか、その手は二度も喰わないぞ?」

その直後に舌打ちした事から演技である事は明らかだ

というか復活して間もなくで演技して取り入ろうなんて・・・

「ダメだアレ、天才とバカは紙一重だわ」

「なんだと!?!」

「あー、うん。君の言う通りだわ」

呆れながらも渡してくるソレは、私にとって未来の選択だろう

「さあ選べ、君の未来を」

取らないという選択もできる、でも私は・・・その前に質問したい事があった

「コレを使えば、誰かを救う事ができる?」

「ああ、出来るよ。きつかけが偶然な子でも、出来ている」

「自分の大切な人を守る事も?」

「君がそれを願うならば」

渡されたソレに私は力を感じる・・・これで私は・・・誰かを守れる

奪い続けた私だけど、こんな自分でも誰かを救う事くらいは出来るはずだ

「受け取ります、使います」

「了解だ・・・では早速使ってみようか」

渡されたソレを胸に私は胸に浮かんだ歌を唄う
Walkure Motte Gebetron
[Walkure Motte Gebetron]

少しだけ感じた痛み、白く視界が埋め尽くされて・・・再び目を開いた時には装いが変わっていた

「背中と腰に羽があるんですけど？」

「それは恐らく武装だな、取り外せ・・・てるな」

「あ、自分の意思で動かせる・・・盾と武器になりそう」

背中と腰にそれぞれ左右3枚ずつ、合計9枚の羽根があるそれを自由自在に動かしていた

「試したいなー」

ボソツと言ったように装いながら、その視線はしっかりとシンフォギア装者に向けられている

「ええつと・・・」

「やるか!?!」

「・・・」

三人ともそれぞれの反応である

慌てているオレンジ髪の子と、挑発に簡単に乗ったちんまい子、冷静に考えている貧

乳である

「今、失礼なことを考えてなかったか？」

「いいえ、全く」

この貧乳、やけに感が優れてそうだ

「そうか、考えてないと・・・」

よし、と思つたら・・・

「などと思うか？」

「ですよー」

すつごく睨まれた、バレてたようだ

「行くぞ、立花、雪音!!」

「は、はい!!」

「先輩それ絶対私怨混ざってるだろ・・・」

それでも3人はシンフォギアを纏つてくれた

「さて、行きましょう・・・さっきの続きよ」

再度構える、そして

「では・・・始めッ!!」

その声と同時に最大脚力で空に飛んだ

同時に羽を外して盾と武器にそれぞれ変える

背中の大きいモノを盾に、腰の小さい方を武器として変形させて・・・

「それッ!!」

「うおっ!!」

「くっ・・・!!」

「うわわっ!!」

射撃してみたがキレイに避けられた、うむ・・・

「これじゃダメか・・・なら!!」

即座に戦術を変える銃撃でダメなら・・・

「これじゃダメかな?」

「んなろ!!」

「遅い!!」

銃撃してきたちんまい子に盾攻撃、意外な攻撃に吹き飛ばされた

「あ、意外といけそう」

「隙あり!!」

「あると思う?」

貧乳の人の斬撃を盾で防御すると同時にガラ空きの腹部に迫撃砲、まあ、空砲だから

大丈夫だろう

「はあああ!!」

「はああ!?!」

盾を破られた、二枚も!!

「なんて爆発力なのよ!!」

そう言いながらその推進力を利用して隅落、体勢を整えた

「ふいー」

「デタラメだな、おい!!」

「トンチキじゃないだけマシでしょ?」

再び盾攻撃、今度は躲されたけど・・・

「これで終わりね」

「しまっ!?!」

4機残して結界を作ってみた、上手く嵌まってくれたようだ

「くっ・・・!?!」

「貴女もね、近寄られたら危ないもの」

ついでに殴りかかってきた子にも同じようにして抑える

「あーあ、残り1つじゃどうしようもないね」

「何か裏があるだろうか？」

「あれ、分かっちゃった？」

大型の盾一つ、それが二つに分離し直剣へと姿を変えた

「やはりな」

「まあ、これくらいはね」

「では、行くぞ・・・」

「ええ・・・降参は？」

「させない、しない」

あー、これは・・・うん

「貧乳は心も貧・・・危なっ!？」

「まずはその失礼な口から切断する!!」

「やっぱり私怨混じってたー!!」

これはマズい、怒らせちゃいけない人を怒らせたようだ

「ととっ!？」

「今度こそっ!？」

「くっ!!・・・なあんちゃって」

「なっ!？」

鮮やかなさばきだったけど、その分軌道予測は簡単だった

白刃取りしてそこを起点に姿勢を崩して首を取る

「これで私の勝ちだよ？」

「それまで!!」

終わりは私の勝ちで決まった

「解除ってどうし．．．あ、出来た」

解除も簡単だった、これはいいな．．．

「あれ．．．？」

目がくらんだ、姿勢が維持できない．．．あと、なんか眠く．．．

「．．．」

あ、これヤバイ．．．

そう思ったけど、襲って来た眠気には耐えられなかった

暗躍する影

「例の計画はうまくいってる？」

「ええ、滞りなく」

「そう、ならいいわ・・・」

通信を切り、その存在はため息をついた

「さて、これからの流れを確認しましょう」

広げていく資料には・・・

「シンフォギア0号機は稼働した、後のピースも揃いつつある・・・問題は」

写真に写る男を見て、齒がみした

「ヴェノムスネーク・・・この男を始末する方法はないものか」

「それならいい方法あるよ？」

「賢者の石はだめよ、あれはもう一つのグループのモノだから」

「ええー!？」

驚きの表情を浮かべる青い髪の少女に彼女は告げる

「局長の判断よ、我慢しなさい」

「ううー、仕方ないよね」

「大丈夫よ、切り札はあるわ．．．まだまだね」

「でもコイツが問題なんだよね．．．」

再び視線は写真に戻る

「この男には弱点がない、隙なく油断なく、私達の存在に気づきかけている」

「アフリカで消えれば良かったのに．．．」

「そうならないからこそ、伝説なのでしょう．．．」

その伝説は．．．

「XOFの存在に気づき壊滅させた手腕、そしてサイファーを打倒する力．．．愛国者達

はそれを危うんでいる」

「だから私達に接触してきた？」

「恐らくはそうでしょうね、しかし厄介なのは．．．」

もう一枚の写真を見せる、そこに写るのは若く、闊達な印象を受ける青年

「この男、オセロットよ」

「うげ．．．」

「この男の情報収集能力は桁違い、それだけでなく．．．」

さらに出されたのは、眼鏡をかけた美丈夫だった

「ミラー、この男も危険だわ．．．この男は欺瞞した情報からでも真実に辿り着ける」
その周りにいる人間の方もヤバイのだ

「これだけの優秀な部下をどうやって集めたのか．．．考察はいくらでも出来るけど本質はそこじゃない」

「こいつらがまるで一つの存在のように連携している事だよ．．．」

そう、一つの存在として動く事、それが脅威となるのだ

「数は問題ない、意思こそ問題．．．それが高次元レベルならなおさら」

「強いが故の繋がりが．．．砕けないかな？」

「それはかつて試したでしょう？」

どうやらかつて試したようである、その結果は．．．

「結果はズタボロ、一方的に攻撃されて袋叩き．．．あれは酷かったなあ．．．」

「ええ、だから普通的手段では無理よ」

そして資料をしまい、彼女は告げた

「でも、絶対に倒すわ．．．局長の願う世界を作るために」

そしてそれで会話は終わる

「ふむ．．．なるほど」

その会話を聞いていた者達がいた、彼女たちが倒そうとしている人間達である

「アイツを倒す……？ 冗談も休み休み言え。一度敗れた程度では理解できんというなら何度でも倒してやるだけだ、そうだろう？」

「ああ、何度でも倒して理解させてやろう……どう足掻いた所で、倒せない相手はいるのだと」

そして立ち上がり、告げた

「これより任務を盗賊討伐に差し替える、派手に行くぞ!!」

「了解した、ボス」

「ああ、行こうぜド派手にな!!」

立ち上がり、三人はそれぞれ動き出す

「俺は情報収集を、解析は任せるぞミラー？」

「オーケイ、任せろ。分かったら流すわ」

「了解だ、任せる……!!」

三者が分かれて行動する、しかしその行動は一つの意味のように行われる

「さあ、決戦は近いぞ……。パヴァリア光明結社」

その顔には自信が溢れる

名付け

「で、持ってるモノが全て偽造品とはな・・・名前は？」

「昔からコードネームだけだったんで、知らないです」

「・・・」

「事実だよ、この子にはもはや名乗る名がない」

ヴェノムスネークが私の事を知っていたおかげで意外にも話はずスムーズに進んでいく

私は渡されたモノを使いながら、誰かの為に戦える場所としてS・O・N・Gへの所属を決めた

だが、私の名前がないのだ・・・だから

「ねえ、その三人で決めてくれない？ 私名前無くてね」

そう言つて三人に私の持つ名前の候補になりそうな本人確認書類を渡す

「ええ!? そんな重大な事・・・」

「だからこそだろう・・・人と関わりを持つからこそ意味のある事だからな」

「その通りよ」

そう言って私は三人を見る

「じゃあ・・・」

三人が指さしたのは、一つの名前だった

「坂上トーコ・・・かな？」

「ああ、この名前のほうがしっくりくるな」

「先輩の言うとおりだぜ」

「それじゃあそれで決まりだね!!」

それ以外のものをゴミ箱にポイして、司令をしている人に渡した

「よろしくお願いします」

「ああ、よろしく」

さて、これからどうするか・・・

「ねえ、聞きたい事があるんだけど・・・」

「ん？なに？」

「服って、それだけ？」

「あ、そうだ」

考えてみたら今着ている服だけだ

三人が反応した

「師匠・・・!!」

「行ってこい!!」

司令も察したらしい、二つ返事だった

「連れてこられた」

「連れてきたんだよ」

三人によるコーデイナーが始まる

「あ、響ちゃんのは無しで」

「なんで!?!」

「合わない、以上」

スパッと行って、考える

ちんまい子の選んだ服は体格が目立つものの、動きやすい

が、いささか破廉恥に見えるのがマイナス点

貧乳の人が選んだ服は可もなく不可もなし、動きやすさに欠けるのがマイナス点だけ
ど・・・

「こつちかな・・・」

でも服自体は機能性があり、着やすさが一番のメリットだった

「ラフスタイルがいいのかよ・・・」

「だって着飾るのあまり好きじゃないもの」

「・・・」

「もったいないだろ・・・」

私はフイーネを見て言う

「アレを見た後だとよりね」

「あー、うん」

着飾っているが似合ってもいる彼女の姿を見て呆れる

ちなみに服の総額は私の物のおよそ6倍強である

「はあ・・・」

「キレイだけどなあ・・・」

「あそこまで金を使う気がないわ・・・質素なほうがいいから」

貧乳な人の選んだものは、本当に質素なものである

そのおかげで目立たないし、とてもよく馴染む

「意外と庶民派・・・?」

「どういう意味だ?」

「所作からして良いトコのお嬢でしょ?」

「・・・どうしてそれを?」

「お茶飲んでた時の手の動かし方、それと普段の歩き方かな？」

そこから予測していいところのお嬢だと推測した

「まあ、そう言われればそうなのだが・・・」

「あまり仲が良くないの？」

「・・・最近、仲直りしたばかりなのだ」

「大切にしようがいいよ、亡くしてから気付いても、戻ってこないものだから」

私は既にそれさえもない、だからこそ今は前を向く

過去がないから未来を歩くんだ、大切な人を見つけて、共に歩むために

「さて、たくさん服買ったし、帰ろうかな・・・？」

「フィーネはどうする？」

「置いて帰るわよ!!」

「今行くから待て!!」

あと、なぜかフィーネを手懐けてしまった

「ちよろい・・・」

誰かがそういったけど気にしないでおこう

素養

「今回の任務は・・・バックアップか・・・」

私が出ることになって数週間がたった

前線に出ることがあれば、今回のように支援に回る事もある

ちなみに私をサポートするバックアップのバックアップ部隊もあるそう

そちらはヴェノムスネークすら与り知らぬ組織らしい

その名称がXOF、副官の部隊を意味するeXecutive Officer Forceであるらしい

この場合の副官とは、ヴェノムスネークの部下の一人の事であり、彼の信頼する人間・・・リボルバーオセロットの事らしい

「オセロットさんてどんな人なの？」

「見かけはカッコいいお兄さんなんだけど・・・」

「拷問狂なんだよなあ・・・」

「それに合わず性格は厭戦派というから詐欺を感じるが・・・」

さんさんな評価だ、本人は聞いていても素知らぬ顔だが

「さて、作戦開始だ・・・」

「じゃあ先に行くねえ!!」

「ちよ?!お前ツ!!高度どれくらいだと思ってるんだ!」

笑顔で振り向いて、私は飛び出した

高度は5000フィート、1キロという高さからの落下でパラシュートのみでの着陸である

HALO降下というこの方法は私にとってある意味馴染みのある方法だ

まあ、何度もやりたくはないけど・・・

「着地成功、潜入したよ」

「冷や冷やさせてくれるな、君は」

「急いだほうがいいからね・・・はい、敵地最深部到達です」

通信が一瞬静かになった

「早すぎないか?」

「だって降下地点をギリギリまでHQに近づけたもの」

「・・・」

そんな芸当を平然とやった私に一同茫然である

「あ、敵が出てきた、敵側の通信設備破壊したから何時でも降下どうぞ」

サクツとそう言つて通信を切り、私は敵を見る

「5人・・・ARが三人とSGが二人か・・・生身なら危ないなあ」

幸いにもImproved Outer Tactical Vest・・・ボディ

アーマーを着ている

銃弾や爆発による破片などから身を守るために使用されるベスト状の身体防護服だ
けど・・・動きづらい

「まあ、この程度なら」

次の瞬間に行動に移った

最初に空マガジン（拾い物）を5人の横に投げ、音に反応したところでSG二人を狙つて飛び蹴りして気絶させ、残り三人のうち二人をSG二人の落とした武器を鈍器代わりにして気絶させて、最後の一人をCQCで倒す

「あー、うん、これは酷い」

ごめんね、と心の中で詫びながら武器を奪い、予備弾倉も頂く

「なあんだ、SGはM1200かあ・・・シヨボ」

そう言いながらも初弾を排莖、その時に違和感に気づいた

「あ、これ改造品だわ・・・ソ連系部品に代わってる」

違和感の正体を掴んだ私は、改めてARを見た

「AK-47、あ、それによく見たらドラグノフ狙撃銃じゃない、頂きます」

シヨットガンを腰の裏に懸架してドラグノフを肩に置く

そうして歩きながら近接をかけてきた奴にはCQCで対応しつつ敵基地を制圧する

「あ、お仕事終わったよ」

「わりい、こつちでトラブルだ」

「人質でも取られた？」

「ああ、クソがツ・・・!!」

私はそれを・・・

「ああ、ごめん見てたわ」

「てめえもいい性格してんじゃねえか!!」

「まあそう怒鳴らないでよ、今から解決してあげるからさ」

「はあ・・・？」

その瞬間、私は人質を取っている人間を狙撃した

「おい、お前・・・」

「狙撃銃を拾ったからね、試しにやってみた」

「距離は？」

「670.5、この程度ならよっぽど暴れてない限り確実に射抜けるよ」

シヨットガンで扉を吹っ飛ばし、私は合流した

「恐ろしい奴……」

「そう言わないでよ、役に立ったでしょ？」

そう言っただけで後ろに向けて発砲する

「そうだな……」

肩を撃ち抜いていた、しかも痛みはしても出血量は少ないようにして

「こう見えても戦場にいた時間のほうが長いのよ？」

そう言っただけで近くの岩に座り、私はお茶を飲む

「そろそろかな……」

「……？」

「敵のヘリが来るわよ」

そう言った瞬間には再度構えていた、そして

「はい、落ちてね」

正確にターボエンジンのシャフトを撃ち抜いてエンジンを破壊して不時着させる

「お仕事終わりかな？」

「ああ……コレで終わりだ」

さして、と

「それじゃ寝るね・・・お休み・・・」

「え!? ちよ!! まだ早いよ!?!」

「眠い・・・Zzzz・・・」

眠いので寝よう、そうしよう

ALICE

「今日、数多くない？」

「確かに……」

「多いです!!」

「……」

とある日、発生したノイズの掃討をしていたが、そこで私は気づいた
数が予想値より多いのだ、それに

「時間で自滅するのに、その傾向もない……怪しくない？」

更には時間経過による自動消滅も起きていない

そこから察するに……

「いや、それはあり得ないだろう……」

「あり得ない、なんてことはあり得ないよ？」

「……」

以前、ノイズを自由に呼び出せる道具を破壊してあるらしく、最悪の事態……悪用
される可能性はないと思っっているようだ

しかしその認識は甘い、何故なら

「人間、便利な道具があるとついついその複製品を作りたくなるものなのよ、その道具が失われても、代わりがあれば問題ないからね」

「だが、それは可能なのか？」

貧乳……もとい翼さんがファイネに確認すると一瞬、間があいて回答が来る

「不可能とは言い切れない、私より優れた科学者がいればあるは……」

「可能なのだな？」

「ああ、可能性はゼロではない」

「厄介な……」

そして、アラートが再び鳴る

「大問題だ、大型ノイズがそちらに迫っている!!それに三方向からも同じく大型ノイズだ!!」

「ええ!?!」

「組織立っているな……」

「合計4、一人で大型ノイズを相手にするのね……問題はないわ」

私はそう言って近い方に向かって走り出す、そして……

「私達の街に、来るな!!」

6枚の翼を集めて作った巨大な剣で真つ二つにした

「あれ、反応が増えて？」

その瞬間、私の体に異変が・・・

「え・・・？」

腹部・・・左側に赤いシミが広がっていく

「つつ・・・!!」

貫かれたのだ、敵に

それに気づいたときは、地面に倒れていた

「な・・・によ!!」

何がどうなったなんてわからない、今はこの傷をどうにかしないといけないけど・・・

「どうやら、歓迎されているみたいね」

さて、どうしようか・・・なんて悩んでいる暇はない

けど・・・傷が思った以上に深い!!

「くっ・・・!!」

マズい・・・意識が・・・視界が暗くなっていく・・・

「トーン!!」

最後に聞こえたのは、フィーネの声だけだった

能力を持つよう設計していた

そのシステムが、人体を制御している!?

「これがお前の目指した、システムの姿なのか?」

了子を殺し、その記憶を継承した私でさえも理解できない現象

それが今、目の前にある

「これが試作機の性能・・・」

目の前には一歩も動かずノイズを掃討するトーコがいる、だが彼女自身の意識はない
試作機に搭載されているALICEが、その肉体を制御し戦闘しているのだ

「了子さん!!」

「今はトーコに近づくな!!」

だが、それを無視して響は行く

「トーコちゃん!!」

《・・・敵?》

「うるさあああいい!!」

トーコの意識が戻った、強引に頭をたたいている

出血は止まっているようだ、よく見ると傷口もきれいに塞がっている

「はあ、はあ!!」

《ウルサイ？うるさい・・・不快》

「フイーネ!!」

「車に乗れ、後で教える!!」

私はそう言い、車に乗る

全員を拾い、帰りつくと私は食堂兼会議室に移動した

「答えてもらおうか、フイーネ」

「ああ、答えるんだろ？」

「教えて下さい」

「教えなさい」

四人の視線が私を捉える

「弦十郎君、機密を開示するわよ？」

「ああ、こうなれば仕方なからう」

私は大型スクリーンに資料を出す

「Advanced Logistic&In|consequence Cognizing Equipment・・・短縮名、ALICE。発展型論理・非論理認識装置とも呼んでいるAIシステム、それが0号機に搭載されている」

「AIシステム!」

「人間を何だと思つてやがる!!」

「その人間の死を恐れたからこそ開発したものだ、論理では説明ができない不可思議な感情を学習することで、戦闘の状況を自律的に判断する能力を獲得し、最終的には本機の複雑な機能を単独で完全に制御する能力を持つよう設計している」

私はそう言つて、トーコを見る

「システムの学習の為に、常識では計り知れない、不条理な存在が必要であり、当時はその存在を確保出来なかったため現在の形となった」

「それじゃあ、0号機はこつちがコケた時の・・・」

「サブプランでもあつた、という事になる」

「ねえ、一つ質問いいかしら?」

トーコが手を挙げて質問してくる

「なんだ?」

「私はどうすればいいわけ?」

「機能として覚醒した以上、どうする事も出来ない、このAIシステムは0号機を構成する基本機能であるため除去不可能だ」

「で、そこからは?」

「学習を終えたALICEがどう判断するかがカギとなるだろうが・・・まあ、心配はな

「い」

4人を見て、私は確信する

間違いなく、この子達ならば、と

「私には出来ない事を平然とするお前達ならば、問題ないだろう」

本は戦闘用AIシステムとして開発したALICEだけど、この子達ならばその運命さえも変えてみせるだろう

何せ私の作ったシンフォギアで私を倒した者達だ、不可能を可能にしたその力があれば……

「未来を変えるのはいつでも人……なのだから」

敗北から学んだ大切な事、忘れていた事を再確認して私は告げる

「0号機を強化改修する、今度は私自ら実施しよう」

「また危ない事するんじゃないでしょうね？」

「トーコは私と共に回収を手伝ってもらおう、現使用者からの意見を聞きたいしな」

「了解、それならいいわ」

イレギュラーがあるならば、ここからだろう

誰が何をしようとも、私が出ることで、守れるモノのために全力を出そうじゃないか

閑話休題

坂上トコロ

元暗殺者の少女、自殺未遂（というか一回は死んでいる）で心臓移植をされて蘇った移植元の人間は櫻井了子・・・フィーネであり、その人格が宿っていた

彼女の説得（？）により、生きる活力が生まれ、始まりともいえる地である東京へ向かう

その先で原作主人公たちを発見して接触、フィーネを分離する奇跡を起こした

またその際、シンフォギアの試作機である0号機を回収、適正者が使えるように改修を施していた改良型を受領、それ以降実戦に参加している

シンフォギアを纏わなくても非常に強い

年齢は16歳であり、立花響とは同じ年である

誕生日・5月2日

血液型・Oh型（ボンベイ型）

身長・168cm

戦闘スタイルは相手により変更する可変型、相手が銃なら自分もそちらに変える

そしてそれを実現できる非常に高い身体能力を駆使した戦術を多用するため、高効率の戦闘を可能としている

また、武装に関してもあらゆるものを人並み程度以上には扱えるため、戦術運用において誰とでも自由に組める汎用度も高い

目的を達成するためならば手段を問わないという過激な面があるものの、本質はとも優しく、一応相手に謝りはする

性格

暗殺者として育ち、仕事をしてきたため流行自体には敏感に反応するが、実行に移すのは熟考した後でという慎重さを持つ

また、ファッションセンスは服の機能を最優先とするため意外に地味なものシンフォギア装者との出会いの時点ではストックもなかったため彼女のために私服のコーディネートがされた程である

人付き合いは好きであるため自分からグイグイ行くタイプであるが、その裏で相手の身体的な特徴で自分の中の呼び名を決定するなどの面では腹黒い

実際に、風鳴翼に対しては貧乳、立花響に対してはオレンジ髪、雪音クリスに関してはこちらまい子という酷いものである

困難にあつた際には自力で解決する方法を最初に選ぶが、戦術的な思考も有しているため危険な際は援護を頼むが、大体はどうか出来るだけの実力があるため援護を頼む事態に陥ること自体が稀である

試作型シンフォギア戦術運用改修型

個体名称 シンフォギア・スペリオル

0号機と呼ばれるシンフォギア、風鳴翼の使う1号機、アメノハバキリよりも前に作成されたモノである

こちらで技術としてのシンフォギアシステムの完成を果たしたのちに1号機であるアメノハバキリが作成された

後に続く2号機イチイバルや3号機ガングニール、その他のシンフォギアの原点であり、他のシンフォギアにはない最大の特徴として様々な武装を自由に運用できる高い汎用性を有する

その反面として、消費されるフォニックゲインが一回の出撃で適正者を殺してしまう

本来のシンフォギアの開発計画ではこちらを採用していたのだが、より効率に優れ、運用面でも問題がなかった現在の形に落ち着いた

その際に封印されたはずだが、回収後の強化改修の結果、偶然その封印が解除されていた

運用に伴い少しずつ学習しており、ついに自我を得るに至る

ただし、現段階ではまだ完全なる自我を得たわけではなく学習は依然継続している
そのため喋り方はまだ機械的である

ちなみにシステムの学習の為に、常識では計り知れない、不条理な存在が必要である

その条件に偶然当て嵌まってしまったのが主人公であった

また、本システム実装の為、1号機以降の機能解除機構と^{エクストライフモード}限定解除は実装されていな

い

模擬戦

「模擬戦ですか・・・？」

「ああ、模擬戦だ!!」

何と言ったらいいのだろうか、目の前にいるガタイの良い人・・・司令が一瞬おバカな人に見えてしまった

「でも今、私のシンフォギアは改修作業中ですよ？」

「今回はギアを使わない内容だ、問題ない!!」

「私には問題ないですけど・・・」

翼^{貧乳}さんや響^{オレンジ髪}ちゃんやクリス^{ちんまい}ちゃん^子に対して問題がありすぎる気がする

「君の実力を試してみたくてな!!」

「構いませんけど・・・響ちゃん達がどう反応するかなって・・・なんでそんなに生き生きした顔してるのよ」

よく見たら三人とも司令の後ろにいた、さてはお前ら画策したな？

ならばよろしい、本気で相對させてもらおう

「分かりました、その代わり」

私は三人を見て告げる

「本気で行くから覚悟しなさい」

三人が固まったのを確認して私はフィーネのいる研究室に入る

「賑やかになりそうだな、医務室が」

「あれ、医務もやってたの？」

「ああ、人材不足らしくてな」

「それは何とも・・・」

「まあいい、しかし本当にこれでいいのか？もつと汎用性を重視してもいいと思うが・・・」

私が要求した武装の開発にフィーネは違和感があるようだ

「システムの反応性は最高レベルに上げたし、運動機能補助も同じ水準だ・・・それなのに武装システム関係はALICE^{アリス}の学習の積み重ねと連動するなんてな」

「そうしないと暴走するリスクが生じちゃうでしょ？リスク回避よ」

「現状では問題ない、ALICE^{アリス}の機能にはある程度の余剰を持たせてあったからな」

「だとしてもよ、人間と同じレベルの学習能力と演算能力があるのなら、急に増えたタスクを捌けなくなる可能性だってあるわ」

マン・マシンのインタフェースであればその可能性は特に顕著となるだろう

その可能性だけは捨てるに捨てきれない

「確かにな・・・なら言う通りに仕上げよう。しかし武装はこれでいいのか？」

「ええ、構わないわ」

武装に関しても依頼している、そちらに関しては要求水準に合うものをヴェノムス
ネークが用意する予定だ

「分かった、後は任せろ」

「変な事してたらシバキ倒すからね？」

「しないさ、理由もないしな」

うむ、表情から見て信じられそうだけど・・・

「で、その割には余計な経費があるようですが？」

「う・・・」

私に頼まれている事が一つある、それはフィーネが余計な経費を使っていたら注意す
る事だ

これはほかの人もやっているのだが私の時が一番効果が出るらしい

「使いすぎたらどうなるか、分かっているかしら？」

「気を付けます・・・」

「もう一声」

「以後気を付けます・・・!!」

「宜しい」

このやり取りも何度目だろうか・・・気にしてはいけないけど

「さて、模擬戦に行つてくるわね」

「ほどほどにな、医務室の仕事を増やさないでくれ」

「分かつたわ、それじゃ」

「ああ、また」

私は一路、シミュレータールームへ向かう

そこが模擬戦の場所でもあるからだ

「内容は、シンフォギアの使えない状況下における戦術的撤退ね・・・私が敵で三人が逃げる方か・・・」

「逃げ切れば勝ち逃げられなかった場合はそのメンバーでやり直した」

「わあい楽しいなあ・・・!!」

武装も選び放題、シミュレーターでの訓練だから痛みこそすれ、肉体へのダメージがなければ何度でも出来る

危険な攻撃は禁止されているけど、それ以外なら何でもOKなので追いかける方は楽できる

「では、始め!!」

さて、早速ですが私のチョイスは

「R P G — 7 で行きますか」

その瞬間、三人の逃げる方向の斜め上に放った

「馬鹿がどこ見て」

「破片で退路を塞ぐのが目的だ!! 散開するぞ!!」

「馬鹿ね、それも予測済みよ」

さすがは年長者、予測は正しい。だがまだまだ、読みが甘い

「それじゃあ今度はこちらでどうかな？」

次に取り出すのはM2重機関銃、それで掃射を始める

「うわわわっ!!」

「良く避けるわねえ・・・逃がすと思うか!!」

射線上にいない他の二人にはS C A R — L で退路を狭める

「くっ・・・!!」

「こつちも見ないでよく当てれるな!!」

「この程度ならね、引き出しは意外と多いの」

M2の弾薬が尽きたので次の銃を取り出す、先程とは違い今度はM4カービンだ

構成はSOPMOD—IIIIアクセサリキットを基準にしてしてあるため扱いには慣れている方である

「はい、一人目ご案内」

「あ・・・!!」

先に倒したのは響ちゃんだ、模擬弾なので死にはしない、その代わりとても痛い

「痛い!!痛い痛い!!」

「あははははっ!!」

バカすか撃ちまくった、楽しい

「うわあ・・・」

「おやあ?そこにおいででしたかあ?」

「ひっ!?!」

声のした方向へ向き、そこを銃床下部に追加されたM203グレネードランチャーで撃つ

「うわあ!?!」

「あらあ、クリスちゃんじゃない、そんなに元気に飛び出て・・・撃たれたいのかな?」

「い・・・いや・・・」

「じゃあ早く逃げないとねえ?」

1秒でマガジンを交換しながら構える、その瞬間に逃げ始めたけど遅い

「片足もらいよ」

「うあつ!!」

「はあい、逃走ご苦労様」

「あ・・・あつ!!」

ガクガクと震える彼女に告げる

「あれえ？そんなに怖いのかな？」

「鏡見ろ今すぐ!!」

「ごめんねえ、近くじゃないんだあ・・・死ね」

「ぎゃあああああ!!」

さて、最後は・・・

「ちつ・・・後は貧乳か・・・体が細くて胸も小さいのは狙いにくいし探しにくいんだよなあ」

「ほう、それは私の事か？」

「あらあ、銃構えてご登場とは・・・そういえば逃げる方も武器が自由だったの忘れてた」
「無力化も自由だ、武器を下に置いてもらおう」

あーやだ、なかなか様になってるわ・・・でも

「はいはい、置きますよ」

武器を置いて私は一歩近づくと、確認のために

「妙な動きをしないでもらおう」

「一つ言つていい?」

「なんだ?」

「慣れない武器は使わない事ね、安全装置セイフテイが掛つたままよ?」

「なっ!?!」

そう、安全装置が掛つたままなのである

「馬鹿な!!」

その瞬間にもう一歩前進して銃を掴み自分のモノにして、彼女の腕を掴んで体を戻し
りながら足払いで地面に叩きつけた

「くっ・・・!!」

「ね、言つたでしょ?」

「降参だ」

「はい、次も頑張りますよう」

一発額に叩きこんでインターバルに入る

「容赦ねえぞアイツ!!」

「酷いよお!!」

「手加減なしとはな・・・」

さて、次も楽しみだなあと思いなながら私は紅茶を飲んだ

まあ、その次も、そのまた次も私の一人勝ちだったのは言うまでもない

緊急出撃

「三人が追い詰められてる？」

「ああ、相手が相手だな」

映像が出される、そこには

「最悪のパターン再びというところかしら？」

別動隊扱いの3人がいるそうだが、その3人とも出合いは最悪だったらしい

それでも仲間として迎え入れるまでの中で、彼女たちの心を動かしていたのは、それを可能としたのは、響ちゃんの才能だろう

それは、前向きな自殺衝動と引き換えだとしても・・・

「分かった、出撃するわ」

「すまない、万全でないのは承知しているが・・・」

「それでも行かないよりはマシでしょう、どうかにかしますよ」

シンフォギア・スペリオルを受け取り私は聖詠を唄う

「お、いいところに来たな」

「・・・？」

「コレを持っていけ、土産だ」

「コレはまた大きいのを・・・」

「今の君なら使えるだろう、試作品だが壊してくれて構わない」

それなら欠片も容赦なく酷使しようかな

「ありがとうございます」

「行ってこい!!」

言われずとも行きますよ!!

「さて、降下中だけどやってみるかな?」

もらっていたのはブルパップ式のアサルトライフル、SAR-21だった

しかもオプションフルセットの仕様である、銃器が好きな私だけけどコレは相当のお金がかかったと思う

さらにもう一つある、こちらは狙撃銃、M82A2だ

対空兵器として使用するため、攻撃時に大きな仰角が取れるよう、ブルパップ式に変更されたM82だったりする。重量とバランスを支えやすいよう、被筒の前後に設置された2つのグリップを握り、レシーバー部分を肩に担ぐ形で構える。

制式採用されたものの、試験の結果メーカー側が期待したほどの評価を得られず、少数の生産に終わった商業的失敗作だ

「うおっ!？」

予想外の反動が来た、なんでだろうと排莢した薬莢をキャッチすると・・・
「なるほ・・・」

25 x 59 Bmm NATO弾だった、反動も当然である、口径が違うのだから
というかこの弾薬、XM109ペイロード用じゃないか!!

「何者だ!!」

「乱入者だけど？」

「くっ・・・!!」

「あと、私の仲間をいたぶってくれたお礼をしないとね」

銃二つを背中に懸架して私は構える

「行くわよ」

その瞬間に変身解除、閃光で相手の目を眩ませながらソーコムピストルで肩を撃ち抜いた

「ぐっ・・・!!」

「ええ・・・」

致命的な隙を作ると見せかけての攻撃に敵は対処できなかつた

しかしダメージは軽微であることから、対策自体はしていたのだろう

「拘束セラミック装甲・・・!!」

「正解よ・・・」

道理でダメージが軽微なわけだと感心しながら、私は告げた

「なんて高価な装甲を使ってるのよ・・・ブルジョアめ」

「そう言うあなたも高級な武器を持っているじゃない」

「さて、響達も撤退しているけど・・・」

その瞬間、敵が笑った

「一人で来たと思ったのかしら？」

「つつ・・・!!」

「あは!!表情変わったわね・・・!!」

こいつ・・・!!

「それじゃあ・・・くたばれ」

その瞬間、私は本気で相手を殴り飛ばしていた

ボディアーマーが大きく凹むほどの一撃で相手を気絶させて皆の所へ急ぐ

「くそっ!!何たる失態だ!!」

焦りが募る、だけども・・・

「ヤバイっ!!このままじゃ皆が的になる!!助けないと!!」

《ヤバイ……やばい……危機感?……皆……仲間?……人の集団……妥当な
選択……助ける……戦闘?……仲間の命を存続させる戦闘……自分が痛みを感
じないのにな?ヒトの痛み、分からない……それがヒト!?!》
ALICEが驚きの反応を示す、まだ人という存在を学習している状態の彼女には私
の行動が分からないのだろう

「これが人よ、ALICE。人の感情なのよ」

《感情……理解不能……》

「理解できるまで学習しなさい」

そして合流と同時に相手を蹴り飛ばした

「がはっ!!」

「私の仲間に何してくれようとしてるのかしら?」

「くっ……なぜここまで短時間で……!!」

「私をなめるな」

蹴り飛ばして壁に叩きつけて首を絞める

「許さないわよ」

「貴女が、0号機の使用だね?」

「だとしたら何?」

彼女は笑う

「逃げさせてもらおうわ!!」

「させると思ってるのかしら?」

「いいえ、もう遅いわね」

次の瞬間、雷に襲われたかのように感電して私は倒れる

「何・・・が!？」

「秘密よ・・・それじゃあさようなら」

「待・・・て!!」

「待たないわ」

私が助けに来たのに、私が助けられる事態になる

これが初の黒星であり・・・私にとって屈辱の日になった

友情と復讐

「で、アレ以降、A L I C Eとの会話機能が追加されたと？」

「ああ、開発した私でも想定外のイレギュラーだ」

あの雷撃により、A L I C Eの機能が一部破損した

だが、人間と同じような作りをしていた為に機能代償が発生、見事に復元していた
その際にデバイスとしての形状も変化、電子的な物になっていた

本人(?)曰く、最適化したモノだそうだ

「最適化でコレとはな・・・」

「驚きと同時に納得もできるな・・・」

携帯の中に入っちゃったのはいただけなかったが・・・

《・・・?》

S Dキャラ化しているのも可愛いキャラである

モデルはどうやら私のようだが

「可愛いわね」

《・・・!!》

あ、画面外に引っ込んだ

「さて、それはさておき」

今日も戦闘だ、今回も同じ敵である

「行きましょう」

戦場は近い、そこには・・・やっぱりいた

「ちっ・・・もう来たのか!!」

「来るわよ、当然じゃない」

サーベルモードにした背面パーツで切り掛かるが躲される

すかさずライフルモードにして連射するもバックステップで避けられた

「はっ!!」

「舐めるなあ!!」

気迫でフォニックゲインのバリアを張り、吹き飛ばした

「なっ・・・これは!?!」

「くっ・・・」

コレで恐らく敵も私の正体に気づくだろう

「フィーネの転生体!?!」

「だったものよ・・・」

そうやって三人を見る、3対3で押されている所を見ると相手の方が強いらしい

「私の友達を守るために・・・貴女達を倒すわ!!」

宣言と同時に空を飛び、狙い撃つ

そこにALICEの声が響いた

《友達は大事にするもの・・・傷つけられたら、相手に復讐しなければならない》

悩んでいるのだろうか？その声には私は沈黙で答える

それは自分で考える事だから

《私の身近な友達は？私を扱う人間・・・友達なら、守らなければならない。傷つけられたら、私は相手に復讐をしなければならない。友情という名の義務・・・でも、その為
に他の人間を傷つけても良いの？》

確かにALICEの意見ももつともだ、理性のみで行動できないのが人間である

だからこそ・・・

「そう、そのために自身でも悪であるとは分かる行為をする矛盾した存在、それが人間という存在よ」

そして私は告げた

「凄いい成長よ、ALICE・・・期待通りね!!」

戦闘用AIとして作られた彼女が、初めて見せた戸惑い

それは確実に彼女を人へと近づけている

「それが、貴様らの力だというのか!? 素晴らしすぎるなッ!!」

《・・・賞賛・・・人間には解らない事が多すぎる。機械では論理に一貫性が無ければ、それは故障・・・そして異常・・・でも、戦争をする人間に論理の一貫性は見られない》
「ええ、そうね!!」

《・・・戦争・・・人間・・・論理の否定・・・異常・・・私は戦争をする為に作られた・・・私は人間になる為の作られた・・・だとしたら、私も異常者にならなければいけないの!?!》

「いいえ、違うわ」

それは違う、何故ならば・・・

「異常だと理解しているならば、貴女は貴女を貫きなさい!!」

《私は私・・・?》

「ええ、そうよ・・・理解するまで思考を止めるな!!」

《・・・!!》

私はそれを異常だと気付けなかった、3人もそれは同じ

だからこそ必要とされるのは、それを異常だと理解している存在、ALICEはそれに合致する存在だ

その彼女はまだ幼い・・・ならばこそ成長と自立に導くのが私だろう

「碎けて、散り失せろおおおおお!!」

同時に繰り出した攻撃で3人をまとめて吹き飛ばして撤退に追い込んだ

それと同時に降り立つ

「トーチちゃん・・・」

「すまねえ・・・」

「面目ない」

「いいわよ、相手が強いならこちらはそれを超えていけばいいだけでしょ？」

敗北から学ぶ事もある、私はそう思う

今日の敗北をバネに、3人は今よりも強くなるはずだから

暗影

「やはり強いわね．．．ファイーネの転生体は」

「元暗殺者だって、驚きだよな」

二人の人間が喋っていた、そこは暗い部屋の中だ

「MSFの動きはどう？」

「不気味なくらい平常だよ．．．絶対何かある」

「そうでしょうね．．．宿敵である我々の動向を、知らないはずがないのだから」

「明らかに何か考えての静観．．．と判断するね」

二人のしている資料には詳細に書かれたデータが広がっている

だが、その中でも注目していたのは一人の少女だけ

「この子をどうにか私達の所に迎え入れられないかな？」

「ええ、本当に．．．」

二人の考え出した結論は．．．

「絶望させればいいのかよ、世界に、人間という存在そのものに」

「あ、それが一番早いかな？」

「ええ、かつての自身を嫌というほど思い出させて、私達に縋らせればいいのだわ」
「協力するね」

「ええ、お願い」

そして具体的な案を練り始める

「まずは、私達の正体を明かしましょう・・・名乗ってもいいころ合いだし」

「そうだね・・・次にどうする？」

「その場において、彼女の精神が揺さぶられる事態を起こすわ・・・そうね・・・立花響を傷つけるのが早そうだわ」

ターゲットも決まり、後は・・・

「じゃあ具体的に・・・」

その瞬間、扉が轟音を立てて開かれた

「おう、やはりこんなところに潜伏していたか・・・探すのに大変苦労したぜ」

「な・・・何故ここが・・・!?」

「ああ？んなもん人海戦術に決まってるだろうが」

乱入した者の名は・・・

「ヴェノムスネーク・・・!!」

「覚えていてくれて大変助かる．．．だがいい加減に飽きてきたんで潰させてもらう」
宣言と同時に抜かれる剣、その剣は漆黒に彩られていた

「今の俺は英雄ではない．．．ただの破壊者として君達を倒そう」

「かつての所業とは真逆ですね．．．それで本当に人間ですか!!」

「人間さ．．．その本質を教えてやろう」

切っ先は鋭く、その先にある瞳は深い哀れみそのもの

そう、彼は知っている．．．自身の目の前にいる者達の行動の理由を

「先に言おう、君達の思う通りにはならない．．．世界は残酷なまでに公平だからな」

「公平．．．この世界が?」

「何を言ってるのこの人．．．そんなことはない!!」

「だよなあ．．．君達ならそう言うと思っただよ．．．」

そして叫んだ、その一言は

「甘ったれてんじやねえぞクソガキ共があッ!!」

激情と共に叩きつける否定だった

「亡くしたものは戻らないんだよどうやったって!!それが分からないはずはないだろう

が!!」

「まさか．．．計画をどうやって知った!!」

「南アフリカでお前たちのやった行動と、日本に渡ってからの行動を解析した、そして目的を理解したんだよ!!」

それは……

「傀儡兵……スカルズ……覆いつくすもの……全てはお前達の作ったものだった……その究極の目標は賢者の石を使わない方法による死者蘇生実験!!」

「つつ……!!」

「完成後培養していたであろうナノマシン改造細菌は既にこちらで完膚なきまで処分した……お前達には後はない!!」

「ならば……こちらの取る道は一つ!!」

次の瞬間、その手に握られていたのは……

「自分で持っていたか……」

「どうせ全て終わるなら……この世界もろとも終わらせるわ!!」

「巻き込んででも復讐する……世界に!!」

「この……大馬鹿者どもが……!!」

銃型の注射器……その中にはナノマシン改造細菌が入っている

その力は……

「ハアアアア……」

「厄介なのが二人も・・・」

身体機能を限界以上に向上させる特殊性を有していた

「緊急通達だ・・・S.O.N.Gにも協力してもらおうぞ」

「了解です、連絡はこちらで致します、貴方は彼女達の市外への攻撃開始を防いでください!!」

「出来る限り防いでみるよ・・・出来るか怪しいがね」

やれやれと思いながらも、青年は剣を構えなおした

緊急事態

「え、敵の基地を強襲した!？」

「何やってんだアイツ!？」

「単独行動とは・・・」

ヴェノムスネークが単独で敵の基地を強襲したという連絡が、緊急回線からの連絡で判明した

しかもその場所は私にとって馴染み深い、ある場所

東京湾観音近くの空き倉庫街だった

「ビッグボスは今、とても危険な状況です。協力をお願いします」

「ああ、分かったすぐに向かう!!」

そしてすぐに向かう・・・その途中で

「ふう・・・やっと完成したぞ!!」

ファイネが私に出してくるのは、再改修した零号機だった

「出来たの?」

「ああ、つい今しがたな!! 試運転も何も出来ないのはすまないが、何とかしてくれ」

「ありがとう、これでまた戦えるわ・・・私の戦いを」

「ああ、戦って勝ってこい・・・そして必ず帰還しろ」

そこに通信が入る、相手は・・・

「ヴェノムスネーク!!」

「おう、こつちに向かつてくれてて何よりだ・・・とりあえず今のところは無力化に成功しているけどいつまで持つか分かんねえから早く来てくれ」

「映像付きかよ・・・それでなんでこんなマネをしたんだ?」

クリスちゃんが聞くと、ヴェノムスネークは一拍開けてから話始めた

「元は俺の因縁だからな・・・それに君達を巻き込むのは気が引けた」

「全くだ・・・いい迷惑だぞ」

「すまん・・・」

映像は動いていないものの、そこに映るのは二人の少女だった

敵として戦ってきた存在である

「銀色短髪の子、名前はカメリアという・・・彼女は北欧では珍しい蝟を食べる習慣を持つ小さな集落に生まれた。その習慣ゆえに悪魔の村と呼ばれて、ある時カルト集団の襲撃を受け壊滅した。その際、自身の命を助けてもらう代わりに両親を笑いながら自らの手で殺害することを強要され、その一件が心に深い傷を負わせた・・・世界を憎み始め

たのはその頃からだ」

「過去まで調べていたんですか？」

「敵を知り、己を知れば百戦危うからずってね」

自虐するように笑いながら、ヴェノムスネークは続ける

「黒髪の少女の名はクレアという・・・内戦下で拘束されて、他の少女達と共に家畜のよ
うに扱われ、「残飯食いの鴉カラス」と蔑まれながら国軍・革命軍の両方の兵士から匿名の暴力
を受けた拳句に捨てられ、生きたままその餌にされた。仲間達が食い殺される中で奇跡
的に鴉により拘束が解けて生き残ったものの、兵士たちから浴び続けた戦場の怒りで心
を壊してしまった。その後、彼女は兵士達を追いかけたが、怒りに囚われながらも狡猾
に夜を待ち、奴隷となっていた民間人ごと兵士達を見境無く虐殺した過去がある・・・そ
の悲惨な過去ゆえに世界を憎んでいるのだろう」

「私や、トーコに似ているのか？」

「ああ、本質的にはそれで間違いはない」

「私はカメラリアを相手するよ、皆はクレアを任せるね」

私はそう言つて、零号機・・・アリスを強く抱きしめる

彼女がそれに反応する

《自分の命と相手の命を引き換えにするなんて、全くの無意味・・・間違っている。そ

れとも私が間違っている？全ての物事を常識で判断するのは罪なの？．．．否定ばかりするのも罪ではないの？》

「ええ、無意味な事よ．．．罪でもあるわね」

《人間には無意味に意味があるの？．．．肯定と否定のバランスのせめぎあい．．．それが感情？．．．それが人間？》

そう、ALICEは今、真に人間を理解した

無意味に意味を見出し、否定と校庭のバランスがせめぎあいながら生き続ける、感情という大切なものを持つ人間という存在を

「そう．．．その通りよアリス．．．それが人間、それが私達なの」

《まだ、学習を続ける必要がありますね．．．》

「ええ、学び続けるのが人間だから」

そして前進しようとしている．．．人が一度はあきらめてしまうことを

「悲しいね．．．」

「それでも、誰かが止めなくてはならない．．．それが私達なら．．．必ず止めてみせる」

そう、彼女達を止められるのは、恐らくこの場にいる私達だけ

「私もサポートするわ．．．黙って見ている事なんて出来ないもの」

「私もお手伝いするデース!!」

「私もする……」

「ありがとう……マリアさん達は響ちゃん達を援護して、私はひとりで行けるから」
改修した零号機には過剰とまでいえる武装が搭載されている

代表的なものとして、ツインバスターライフルが一番だろう

フォニックゲインを銃本体に搭載されている高効率変換機で荷電粒子に形質転換を行い、その莫大な出力を収束圧縮して放つ武装であり、理論最高出力は、ルナアタック時の落下してくる月の欠片を最高出力3連射で破壊可能なほどだ

二番目に、リフレクターインコムがある、これはオールレンジ対応の攻撃補助装備で、反射フィールドを形成して自分が撃ち込んだ攻撃を反射して敵にあてる武装である。ただし、射出したインコムと母機、敵機の位置を把握するのみならず、ビーム反射が適正な角度となるよう同時計算する必要がある、搭載機のコンピュータに極めて高度な演算能力を要求するため、私とALICEの組み合わせで初めて有効活用できる装備だったりする。加えて、一射の偏向するだけで再チャージが必要になるけど、それは私の使い方だからこそ実現可能だからだ

「いこう、皆……あの人達の復讐を止めるために!!」

さあ、いこう……これが最後の戦いになると信じて

決戦開始

「さて、どうしますかねえ……」

私は宣言通り、カメリアの前に立つ

覚醒した彼女は私を見て……

「転生体……」

と呟いた

「そう呼びたければ呼ぶといいわ……私は坂上トコよ」

そう言つて、背面パーツを剣に変えて私はその切っ先を向けた

「貴女の過去を知つて、行動の理解は出来た、境遇が同じなら私もそうすると思うよ……
それでも、共感だけは出来ない」

そう、私の思いはコレだ

理解は出来ても共感だけは出来ない、それは私の彼女の違いでもある

「貴女には……信じられる人さえいなかった……」

その違いが今を生んだのだろう……人に裏切られても、手を取り合おうとする響ちやんを羨ましく思うのは、根源が彼女と似ているからかもしれない

だからこそ私は彼女を止めなくてはならない・・・彼女に未来をプレゼント出来たらと思う

「だからせめて・・・その涙を、悲しみを拭い去るわ」

「やってみせる・・・シンフォギア装者!!」

「いぎ・・・参る!!」

同時に駆け出し、剣がぶつかる

「過去を知ったからなんだ!!なぜ今更になって現れた!!お前達が世界の流れに抗してきたというのなら!!なぜあの時に、あの地獄絵図にどうして来てくれなかったんだ!!」

「・・・!!」

「何故私の家族を救ってくれなかったんだ!?答えろおお!!」

「つつ・・・!!」

確かに、彼女にとっての地獄であったのは言うまでもない

だけど私はその時の光景を知らない、想像する事しか出来ない

「確かに、私はその時の光景を知らない、想像する事しか出来ない・・・でも大体わかる気もする・・・だけど本当の所は分からないし、貴女が今しようとしている事は絶対に分かりたくない!!」

自分の復讐に世界を選ぶのは、間違いだと思うから

「私は、私の信じるものを守る!!」

「つつ・・・!?!」

切り返しと同時に距離を取り、ツインバスターライフルを撃つ

交わされると予測しておき、射撃を偏向、背中を削った

「それに私達は貴女が考えるような英雄なんかじゃない：ただのちっぽけな、一人じゃ大した事も出来ない、ただの人間なんだ!!」

「ええそうでしょうね、そんな事なんて百も承知よ!!それでもそう思わなければこの憎しみの炎を消せやしない!!」

「肉親を、家族を自らの手で殺める事を強要された気持ちは理解できる!!私だって似た境遇だから!!」

私も、兄弟のように、家族のように思っていた人間を自らの手で殺めた事があるから・・・

「だからって、人類を滅ぼしていい理由になんてならない!!」

そう叫んで、私は彼女を蹴り飛ばした

「そつちの正義が、いつまでも通用する世界ではない!!」

《一方の正義は他方の悪。互いに相容れることは出来ない。それではどちらかを正当な論理として受け入れなければならないの?》

A L I C E がその言葉に反応を返す

《違う。どちらも狂気に取り付かれているのだから。どちらの論理も正当ではないのだから・・・ああ、私の中を2つの意思が駆け巡って・・・》

「人工知能に、自らの意思が宿ったというのか!?」

「ええ、彼女は形を変えた私達よ」

《いけない!!そこに入ってはダメっ!!私の論理に触れては!!弾ける!何か、弾けていくっ!!》

A L I C E の困惑、新たな覚醒・・・そして最終局面

「何かと戦うならば、自らの意思で戦わなくてはならない!!」

「任務でなく責務でなく、一時の感情でもない、自らの確固たる意志で!!」

《そう。私は自分の意志を持って、自分で戦わなければならない!!》

私達二人の戦いが、彼女を真なる人を超えた存在に昇華していく

《私は・・・私は、落ちなければいけないの!?!》

「その必要はないわ、A L I C E・・・貴女は私が守ってみせる!!」

《・・・!!》

A L I C E が息をのんだ、そして・・・

「それが出来るならば!!」

相手の反応に私の取る選択は・
・
・

激闘の果て

「目的を果たさせてもらおう・・・!!」

「させないよ、私達が貴女たちを止めてみせる!!」

それが、響ちゃん達と約束したこと

未来は今も不確定だから、私達には選択が出来る

だからこそ、その未来を絶やしてはならない

「もつと早く、計画を進めるべきだった!!」

「結果は変わらないよ・・・私達が止める事には!!」

剣戟と打撃、武装を瞬時に変えながらの戦闘は私達しか出来ないだろう

「く・・・決めきれない!!」

「そんなものか、転生体・・・坂上トコ!!」

「言ってくれるね・・・なら」

切り札の一つを解放しよう、この子には、それでも勝てるか怪しい

「決戦機能解放!!」

次の瞬間、背中に搭載されている6枚の翼が光を放ち始めた

「光翼展開!!」

高出力殲滅形態、光翼展開モード……この形態は弊害を有する代わりに高い殲滅力を発揮する

その弊害とは、私自身のフォニックゲイン化……意思を持ったフォニックゲインへと変貌してしまう

それが何回目になるのかは分かっておらず、切り札としては使いたくなかった

「はああああッ!!」

「ああああ!!」

先ほどよりもさらに早くなった戦闘速度に敵も対応してくる

だが、遅い……演算さえもこちらには強力なバックアップがある……ALICE というバックアップが

「世界には強者が多い……弱者は駆逐される!!」

「世界に強者なんて存在しない!!この世界に生きとしいける人間全て、弱者なのよ!!私も貴女も弱者だ!!」

何かを失うのは怖い事、でも生きるために何かを消していかなければ生きていけないのが世界だ

自分にとっての何かが削れていくのを自覚しながら、それでも生きていかなければな

らない

過去は戻らないからこそ過去であるとは、ヴェノムスネークの言葉だ

取り戻せないからこそ、そこに意味がある・・・

くあなたたちは今、とても素直になった。その素直さは、人間にとって本当の意味での素直さ・・・」

私たちのやり取りを聞いていたALICEが、自身の意見を述べる

く人間が虚勢を張るのは相手が怖いから。他人に従順なのは、自分を否定されるのが怖いから・・・だから、怖いから他人を巻き込む。敵がいるから、怖いから。そう・・・恐れを隠そうとするから、あなたたちは逃げています。決してあなたたちを否定しないで、いつも受け入れてくれる存在へ・・・」

「それがどうした!!」

「ええ、アリスの言う通りね」

相手はそれを否定し、私はそれを肯定した

く敵とは何？恐怖とは何？それはあなたたちが自分自身の心の中で、私が持っているなかつた心というものが作り出した虚像・・・分かつたわ、私を犯すならば犯せばよい。私とこの人の心はそんな事で貴女達の物にはならない。私達はいつまでも、おとなしいままでは無いのだから。貴女達を否定する事も出来るのだから。私達は私達。もう、誰の

ものでも無いのだから。誰にも支配する事はできない。誰も支配する事もしない>

そう、彼女はたどり着いた・・・人としての自我に到達し、自己を作った

それは人としての覚醒であり、機械から人への進化とも言える

「人は誰であつても、過ちを繰り返す!!だから人は人なんだ!!その繰り返しを、自分たちの積み重ねを残して次世代によりよき世界を作つてもらおうように託す!!」

人の作つてきた歴史とはそういうものだ、理解している

愛と友情・・・それは全ては自分以外の誰かがいるからこそそのもの

「ならば、私こそ真の人間だ!!人間は自らの自滅も厭わない!!」

「そんな世界は嫌なのよ!!」

そんな世界は嫌だ、一人の人間・・・自分だけしかない世界なんて寂しすぎるから

「それが人間だという事は、一番理解しているだろう!!」

「だとしても、何度でも言つてやる・・・そんな世界は嫌だ!!」

自滅するのもまた人間だと、知つていても私は信じ続ける・・・人の力を

人という存在は何度でも立ち上がれるのだから

「破壊するというなら破壊すればいい!!でも、人の勇気を壊す事なんか出来ないツ!!」

「つつ・・・!!」

「1人の人間が、人間という種の終末を、背負う事なんか出来ない。だからこそ、臆病な

人類はこの数千年もの間、生き延びてきたんだ!!」

それが人間の秘めた可能性、臆病であるが故に他者を求めるからこそその強さ

それを体現している存在を私は知っている、そしてその子と共に明日を見たいと思っ
ている

「ああああ!!」

「うおおお!!」

互いに突き出した武装が砕ける

「これで終わりだ!!」

「まだッ!!」

装甲を剥がしてその爆圧で距離を一瞬取り、最後の武装・・・ツインバスターライフルで狙撃しながら叫んだ

「私の・・・人類の勝利だ!!」

「・・・」

最後に敵が叫んだ言葉が何か・・・私は理解出来る

「なんで・・・」

彼女も私も人だった・・・理解出来るはずだった

なのにこうなってしまった・・・その悲しみが私の頬に涙を流させる

「なんで涙が、止まらないの？」

背面の装備が音を立てて壊れる・・・機体が持たない

「もう、動かないなあ・・・」

体力も限界まで使い切り、指先一つ動かすことが出来ない

「あー、割とヤバいかも・・・」

かなりの高度まで上昇しながらの戦闘だった、重力加速度的には非常にまずい
地面に激突したらご臨終確定コースだ

「トーチちゃん!!」

市街地がくつきり見え始めたところで、響ちゃんが私を抱えてた

「来ると思ってた」

「無茶しすぎだよ？」

「響ちゃんに言われたくは無いなあ・・・」

敵は倒した・・・でも、これで終わる気がしない

私達はどうかやって生きていくのかも決まっていけないけれど・・・

「暖かいなあ」

「眠いの？」

「ちよっとだけ」

でも、誰かと繋ぐこの手は、絶対に離さない